



左：澤田 華 | 「漂うビデオ (ナイト・オブ・ザ・リビングデッド、懐中電灯)」 | ビデオ (96分) | 2023 | 撮影：中村マユ

右：谷平 博 | 「問いと答えを同時に言う放浪者」 | 板に紙、鉛筆、グラファイト | 664 x 532 mm | 2022

showcase #12 curated by minoru shimizu

"現実の行方 -Whereabouts of photographic reality-"

澤田 華・谷平 博

2024年4月12日(金) - 5月12日(日)

上記会期中 金・土・日 12:00-18:00 開廊

アポイントメント 承ります

入場無料

eN arts では 4月12日より、清水穰氏のキュレーションにより写真・映像に特化したグループ展 “showcase #12” を開催します。展覧会のタイトルが示す通り、写真・映像の現代若手作家の「ショーケース」となる showcase 展は2012年からスタートし、本展がシリーズ12回目となります。そして今回 本展の為に 清水氏より選出されましたのは 澤田華・谷平博のおふたりです。

恒例になりましたが、eN arts は 本年も KYOTOGRAPHIE2024 に KG+ for Collectors として参加致します。
(<https://kgplus.kyotographie.jp>) KYOTOGRAPHIE2024 のテーマは「『SOURCE』一源は初めてであり、始まりであり、すべてのものの起原である。」 澤田・谷平両氏の作品の源を探るべくキュレーションされた showcase #12 にて、写真・映像作品における現実の行方...写真が源なのか、現実が源なのか...両者の作品の源を探りにお出まし下さい。

皆様の御来廊を心よりお待ちしております。

Naomi Rowe | eN arts

eN arts

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側円山公園内八坂神社北側
www.en-arts.com | info@en-arts.com | 075-525-2355

showcase #12 curated by Minoru Shimizu

現実の行方

第12 回目のshowcase は、驚くほど緻密に書き込まれた鉛筆ドローイングで注目された谷平博（たにひらひろし1982生、初登場）と、2017年度キャノン写真新世紀優秀賞（Sandra Phillips選）を受賞してから活躍著しい澤田華（さわだはな1990年生、2018年以来再登場）を取り上げる。

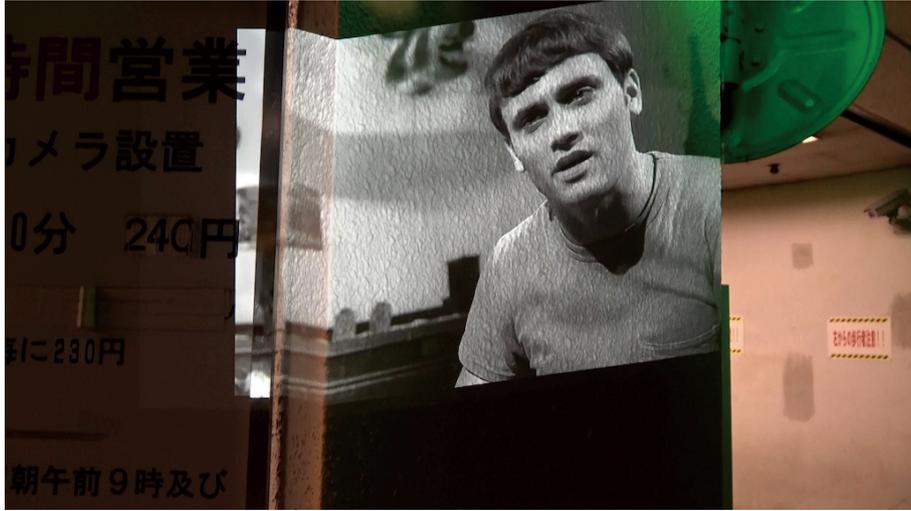
谷平の作品で、大自然の中でシャーマンと化した人物が、硬い鉛筆で精緻に描きこまれている。写真は、その登場以来、肉眼に見えないものを次々と映像化してきた（最果ての自然や宇宙の写真、コマ以下の瞬間を捉える科学写真やスポーツ写真、心霊写真...等々）その結果、我々の知る「現実」は、可視と不可視を問わず、もはやすべてありふれた写真と成り果てたと言って良い。写真こそが現実だ、写真のように描かないと人はもはやリアルだと言って欲しくない.....1970年代に生じ、いまだにYouTubeなど巷でよく目にする、スーパーリアリズムのドローイングは、その事実の皮肉な表現なのだ。それとは異なり谷平は、写真化した「現実」を超えるもの、写真に写らないものを求めて鉛筆を握る。紙面を刻むような谷平作品の本質、その超細密の線の輻輳から生まれる灰色の輝きの美しさは、そのコンセプトからして写真に写らない。必ず実物を見てほしい。

さて、写真とはつねに「何か」の写真である。この「何か」、すなわち写真の指示対象（レフェラン）は、写真の外に存在する現実とみなされてきた。澤田華の対象は、インターネットで出会う画像である。それはすべてスキャンされた画像であり、言い換えれば真空パック画像である。ここで澤田は、真空パックを切開し、現在可能なデジタル的手法を駆使して、ぺちゃんこになった画像を三次元に復元することで、かつて存在した「何か」、すなわち写真の外部へと遡行しようとする。いったいそんな「何か」は現実に存在したのか、しているのか？

もっとも、かつて存在した「何か」を澤田自身も信じているわけではない。澤田作品は懐疑的な遊戯性に満ち、むしろ「かつて存在した何か」から完全に切れてしまった現在のデジタルイメージのあり方をユーモラスに浮かび上がらせる。

2024年4月、清水 穰

澤田 華 | Hana Sawda



「漂うビデオ (ナイト・オブ・ザ・リビングデッド、懐中電灯、横浜)」 | ビデオ (96分) | 2023

大抵は見過ごされてしまうような些細な物事に、やけに引っ掛かってしまうことがある。例えば、たまたま写真に小さく写り込んだ何か。聞き取れなかった言葉らしき音。映画を見ているモニターに反射する自分の姿。「分かる」と「思い込む」の共通性。そうした時に立ち止まり、観察してみると、作品のスタートになる。

図像や言葉というのは、案外漠然としていて、掴みどころがない。だから、それに触れた人の知識と経験から導き出される「想像」によって意味が形成されて、受容される。「想像」はまるでパテのように、自然で便利に、凹凸や穴を繋ぎ埋めてくれるが、たとえその埋め方が多少荒々しく無理が生じていたとしても、そのことが意識されることはない。

私は、図像や言葉と「想像」の間で勝手に結びついてしまう、あたかも自然であるような振る舞いをするこの運動を、いちいち停止させる、あるいは過剰にすることで、これらの関係性を一瞬明らかにする。そうすることで、図像や言葉に元々あった歪みや欠落、ズレや偏りが露わになると同時に、そこに入り込もうとする私たちの「想像」にもまた意識を傾けることができるようになる。(たとえすぐにまた「想像」が追いついて、馴染んでしまうとしても。)

澤田 華

谷平 博 | Hiroshi Tanihira



「わからないことを問い続ける放浪者」 | 板に紙、鉛筆、グラファイト | 532 x 664 mm | 2021

作品に描かれている人物はブッシュワッカーと呼んでいる架空のキャラクターに扮した自分自身の姿で、背景にひろがる風景は、自分の住んでいるところから半径数キロ圏内の山や海である。ブッシュワッカーとは何か説明すると、この作品の元となった映像作品を作ったのが2004年だったが、その前年にイラク戦争を始めたブッシュ(bush)大統領を杖でピシャリと打つ(whack)人(=Bush Whacker)という意味の造語である。戦争を始めた権力者を杖で叩くということから反戦メッセージが想起されるかもしれないが、反戦がテーマというほど社会性は強くはなく、ただ当時のみんなが感じていた不穏な空気が反映されて生まれたものだと思う。権力や社会を変えるのは民衆であってほしいという思いから、ブッシュワッカーの服装はいわゆる労働者階級の普段着といった格好そのままにしている。モチーフに寓意性を持たせることは時に作品を限定的意味合いに固定してしまう恐れがあるが、これは理解に必要な事だと思ったため記述した。

それとはまったく別に、ブッシュワッカーのマスクには神道の行事で使う榊が使われていたりするなど、日本の文化、特に来訪神(まれびと)からも影響を受けている。そして世界各地に来訪神に似た行事があったりするのは興味深い。

国際情勢が悪化していく中、世界の中で日本人であり続けること、自分自身が世界とどう関わっていくことができるのか、その探究が制作の根底にある。

谷平 博